２０２３年2月１９日　Ｎｏ.３６５５　週報上掲載

先週の講壇から　　〝心の灯を消さないで〟

マタイによる福音書 第12章15節～21節

聖句「正義を勝利に導くまで／彼は傷ついた葦を折らず／くすぶる灯心を消さない。／異邦人は彼の名に望みをかける。」(12:20,21)

１．《ともしび》　スウェーデンの作家、ラーゲルレーヴに「ともしび」という童話があります。クリスマス礼拝の聖劇で、この「ともしび」の主人公ラニエロを、私は演じさせられたことがあります。自転車の事故で顎を切って、髭が剃れずに伸び放題になっていた私を見て、牧師が「お前、ラニエロの役をやれ！」と指名したのです。この出来事が、私にとって信仰について深く考える契機となり、翌年、洗礼を受けて、やがて牧師の道を歩むことになったのです。

２．《ラニエロ》　「ともしび」の粗筋です。暴れ者のラニエロは、自らの強さを誇る名誉欲の固まりのような男でした。十字軍で手柄を立てた彼は、功名心から、エルサレムの聖火を故郷のフィレンツェまで届けようとします。旅に出発するや、今にも消えそうな灯火を身を挺して守るために、自らも弱い者となり、盗賊に身ぐるみ剥ぎ取られてしまいます。けれども、蝋燭が無くなりそうな時には、巡礼の老婆に、雨に降られて灯が消えそうな時には、小鳥たちに助けられるのです。これまで目もくれなかった弱い者たちに助けられて旅を続けるのです。この苦難の旅によって、彼は内面から変えられて行くのでした。

３．《燻ぶる灯心》　戦争や災害の犠牲になる人たちのことを思います。「鎖の中の最も弱い環が、最初に壊されて、鎖全体が役を成さなくなる」という言葉があります。高齢者や障碍者、幼い子どもたちから亡くなって行くのです。戦争や災害の有無に拘わらず、世界中が、強者の論理で進んでいます。けれども、武器を振り回して、大勢の人を打ち倒す行為よりも、１つの弱々しい灯火を守り抜く方が、遥かに勇気と根気が必要です。神が喜ばれる真の供え物とは、他人から奪い取った財宝ではなくて、愛から迸り出た行ないです。イエスさまは「争わず、叫ばず」「傷ついた葦を折らず、くすぶる灯心を消さない」御方でした。

朝日研一朗牧師